

4. 室町時代の刀（古刀期 最後の時代）

<前期>（西暦 1349 年から 1466 年）

足利幕府も 3 代将軍義満の代になってようやく安定し暫く平和が続きました。

古来武器は、戦乱が終った平和時において発達するのが通常であり、刀もこの例外ではなく戦乱を通じて騎兵より歩兵へと部隊編成の主力が移ってしまったので太刀が^{すた}廃れて^{うちがたな}打刀を腰に指すのが普通の状態に変化してきました。打刀は^{うちがたな}刺刀（^{きしかたな}直刀）の反対語で、打ち切る、断切るのに便利な刀という意味が含まれ、抜き打ちという言葉もここから生まれています。

そして、この時代から^{ほいとう}佩刀方法が変わりこれまでは環を付けて刃を下にして腰に下げていた方法から武士は刃を上にして大小を腰に指すようになっていきます。刀は抜くにも便利な先反りのある姿が流行し始めます。

この時代の刀は腰に指すのに都合の良い姿で人を斬るのにも都合の良い先反りが加わり優雅さよりも実戦的な実用刀となっていきます。

<室町前期の刀> 太刀



<後期>（西暦 1467 年～1595 年）

応仁の乱によって始まるこの時代は戦国時代とも呼ばれる時代です。

全国が統一される室町末期まで全国的に戦乱の絶え間ない時代になります。

戦闘方法は完全に徒歩戦が主力となり刀は屋内の戦闘にも便利なこれまでより短い二尺二寸前後で元身幅と先身幅の差の少ないがっちりした片手打ちの先反り刀が流行します。

この時代はうち続く戦乱のために刀鎗の需要が多くなり精良な注文打ちだけでは需要に応じきれない為に「数打ち」と呼ばれる粗製の大量生産品が作製されるようになりました。

中間距離の刺突に抜群の威力を発揮する鎗は騎馬に対しても徒歩戦においても重要な武器として重宝され製作も急増しました。

またこの時代は寸詰まりの諸刃造りの短刀、あるいはよろいどうし鎧通しなどが盛んに作られました。

<室町後期の刀> 打刀



応仁の乱を中心として刀剣は、対中国(明)貿易の最重要品として輸出され、大いに外貨を稼ぎました。その数は15万振りを下らないといわれるほどの大量のものでした。

しかし、これらの殆どは当時の新作刀であり、いわゆる粗製濫造品でした。

これは蒙古来襲以来、日本刀の優秀さの立証されていることや、近くは八幡大菩薩の旗を立てて、中国沿岸に来襲する八幡船の倭寇に戦々恐々とした、当時の明皇朝の買い占めによるものです。

これは倭寇や不逞のやからが日本刀を購入して治安を乱すことを恐れて採られた処置でした。

*倭寇：13世紀から16世紀にかけて朝鮮半島や中国大陸沿岸を襲撃した海賊集団のこと。

<参考文献>

日本刀の鑑定と観賞：金園社 常石英明

日本刀：岩波新書 本間順治

日本刀の歴史：金園社 常石英明

日本刀辞典：光芸出版 得能一男

古代の刀剣：吉川弘文館 小池信彦

<写真・図>

バーチャル刀剣博物館

「刀剣ワールド」より

文責：松成初博